

片岡 博尚：中国科学院海洋研究所訪問記

中国科学院海洋研究所の文字が浮かぶ褐色の石壁の左の門を入ると大きな看板が目に入る(図1)。紺色の海に一艘の船、その上の青空の中に朱で江澤民国家主席の署名入りの大書。「攀登科学技术高峰为我国经济发展国防建设和社会进步作出基础性战略性前瞻性的创新贡献」と読める。漢字の国へ来たという実感がわき起こる。

2001年10月23-27日、青島にある中国科学院海洋研究所、実験海洋生物学開放研究実験室(Experimental Marine Biology Laboratory, Institute of Oceanology, Chinese Academy of Science, EMBLC)を訪問した。段徳麟教授(Prof. Duan De-Lin)が、セミナーに招待して下さったのである。同研究所の段教授と曾呈奎教授(Prof. Tseng Cheng-Kui)には去る6月22-25日に山形大学で開かれたアジア太平洋藻類学連合国際シンポジウム(藻類49巻3号p. 221-3参照)で初めてお会いした。曾教授は山形の帰路仙台に立ち寄って魯迅の学んだ教室を訪れることを希望されたのだが、チケットの都合がつかず心残りのまま帰国されたのである。段教授はまだ30代の新進気鋭の藻類学者である。彼は私たちの「フシナシミドロの光形態形成反応は核を照射域へかき寄せて起こる」という発表に興味を持たれた様子で、紅藻類の培養に光生物学を導入するため、私を青島へ招待して下さったのである。1994年青島での第5回国際藻類学会に参加できなかったので、私は大変喜んでこの招待に応じた。有名な青島ビールも楽しみにしていたことはいまでもない。

関西空港からANAで約2時間半、青島空港には段教授の研究室の大学院生、王秀良君と夏鵬さんが迎えに来てくれた。タクシーでひとまず黄海飯店へ。研究所から歩いて5分ほどの3星ホテル。10階の部屋の窓から正面に海洋研究所が望める(図1)。荷物をおいて、段教授と再会、王、夏さんと夕食をごちそうになった。本場の青島ビールは絶品であった。94才になられた曾教授はどこかの重要な会議に出張されてお留守であった。今も毎日出勤して熱心に研究されていると聞いてたいへん驚いた。

翌24日、ホテルの朝食は5種類の粥、30種以上の煮物、炒め物、それに様々な饅頭類が並ぶ豪華なバイキングであった。15種程度の総菜と5種の粥を食べ比べただけで満腹してしまった。味は抜群、価格は20元(約300円)。迎えの王君と研究所へ向かい、最初に目にしたのが冒頭の看板である。今もスローガンが好きな国民なのだ。

海洋研究所は2000年に開所50年を迎えた。組織は研究系統、開発系統、支掌系統、管理系統よりなり、研究系統は上記EMBLCの他に、海洋還流と環境浅海動力過程開放実験研究室(Lab. of Ocean Circulation and shallow Marine Dynamics)、海洋生態と環境科学開放実験研究室(Lab. of Marine Ecology and Environmental Sciences)、海洋地質動力過程と古環境開放実験研究室(Lab. of Marine Geological Process and Paleoenvironment)

の計4つの基礎研究中心の開放実験研究室と以下の3つのR&Dセンターで構成されている。すなわち、中国科学院海洋生物技术发展中心、应用海洋化学工程研究发展中心、海洋环境工程技术研究发展中心である。(以上漢字は日本語表記に改めた。支掌の掌には手扁がついている。Support Systemのことで、現在改築中の標本館や図書館がここに含まれる)。

開放実験研究室とは日本の共同利用機関のようなものであろう。研究目標、財政とも政府の直轄管理下にある。今回紹介するEMBLCのパンフレットによると、1987年曾教授を初代主任として発足した中国唯一の海洋科学関連の開放研究室で中国の海洋生物技術と開発のための最重要基地であるという。共通機器室には遺伝子解析装置や共焦点レーザー顕微鏡も備わっている。このパンフレットの冒頭にそのモットーが書かれている。曰く、「開放 流動 連合 競争」。

EMBLCは4分野の基礎研究分野と2つの応用的研究分野からなる。日本語で書くと、基礎研究分野は、海藻の生理学と発育調節、海藻生殖質と種苗の生物学、動物分子発生生物学、海洋動物生殖と遺伝子工学、応用分野は、病害微生物学、海洋薬源生物学及び機能遺伝子の高効率発現のための方法論、となる。基礎研究とはいえ、中国の伝統である実学の色彩の強い布陣である。



図1 上：黄海飯店より海洋研究所を望む。矢印が研究所。手前はスポーツセンター、中：海洋研究所の正門、下：江澤民主席の筆になる看板。

段教授は海藻の生理学と発育調節分野を主宰し、現在、王、夏、李の3人のD2と王技官がいる(図2)。王さん、夏さんの2人が *Laminaria* の分子系統と育種、李さんと技官の王さんが *Gracilaria* や *Chondrus* の発育生理学を研究している。中国科学院にくる学生は修士課程は北京で過ごし、博士課程からそれぞれの研究所に移ることになっているそうで、来年青島へ来る2人のD1は紅藻類の発育生理学に合流する予定とのことである。25日、午前9時から11時半すぎまで「Photomorphogenesis in algae」という題で、光屈性と光形態形成を中心に青色光が藻類の発育を制御していることを EMBLC のセミナーで話した。海に起源をもつ全ての生物にとって青色光が最大の効果を持つことは、海底には青/緑の光しか到達しないことから理解できると言ったとき、十数人の聴衆は嬉しげに頷いていた。

セミナーの後は宴会である。青島料理はさすがに海鮮が主で、さっぱりした逸品が多かった。青島ビールにまことによ



図2 段教授の研究室メンバーと
前列右から段徳麟教授、筆者、王継成技官、後列右から夏鵬、王秀良、李文紅の3院生。

く合う。中国では乾杯は文字通り杯を干したことを見せなければならぬ。ドイツで Nagelproben! とやるのと同じである。違うのは会話の区切りごとに乾杯を繰り返すことである。幸いなことに蒸留酒のような強い酒ではないのでつぶれることを免れた。後には十数本の空き瓶が林立していた。段教授と午後は青島旧市街を散歩した。古いドイツ租界時代の建物を保存することが結構大変らしい。夕方は美人の夏鵬さんがライトアップした名所、青島棧橋と有名な水餃子の店に案内してくれた。まだ昼の料理が腹の大半を占めていて、おいしい水餃子も一皿分も食べられなかった。彼女は「日本映画は好きですよ、そんなおつあいおつあいつという女優がとくに好き」という。松島菜々子のことである。「北京には空がない」と智恵子のようなことを言う彼女はハルビン育ちで、温暖で晴れの日が多い青島がとても楽しそうであった。

翌日は王君が飛行機で上海まで同行してくれた。青島から2時間あまり。初めて国内便に乗った。英語の通じる同行者がおればこそである。上海には中国科学院生命科学研究所がある。隣接する科学院の招待所に泊まった。上海はちょうど APEC が終わったばかり。人々は成功裡に国際会議を終えたことに満足げであった。しょぼくれた日本と違って大変元気である。街は人が一杯。信号を無視して横断する人々の脇をパス、パスとどこか間の抜けた警笛を鳴らしてバスが疾走する。バスを巴士と書くことを知ってよけいおかしかった。感心したのは市街中心部なら運賃は一律1元(約15円)であることであった。社会主義のいいところをちゃんと残している。名所預園を見物した。麦当劳(マクドナルド)、肯德基(ケンタッキーFC)の看板が反り返った屋根の古い建物と好対照となっている。混雑と喧噪は懐かしい大阪の雰囲気である。私も覚え立ての中国語で元気のいい土産物屋のおばちゃんから絹のスカーフを値切って買うことに成功した。満足した。

(東北大院・生命科学)